霞ケ浦汚染の背景について

久保田治夫

霞ケ浦の汚染が進み、市民やマスコミが騒がしくなるにつれ、主犯論争が盛んになってきました。確かに、このように汚れたのには、それだけの原因があってのことですから、その根源を追求するのは重要なことです。しかし、今日の霞ケ浦は二つや三つの病気持ち程度で、このような瀕死の状態に追い込まれたとも思われません。お互いに責任のなすりあいをしているときではなく、その病源を一刻も早く取り除くことが大切です。加害者は謙虚に自己批判し、監督者は今日まで放置してきた責任を自覚しなければなりません。また、そうさせることが私達住民の務めではないでしょうか。

十年前までの霞ケ浦の水は奇麗でした。夏ともなれば水泳場が各所に開かれ、水浴びをしている子供達の顔は健康的で、私達の目を楽しませてくれました。ところが五、六年前から雲行きがあやしくなり、水泳の禁止区域がだんだんと拡張され、ついに天王崎（麻生町）を最後として、もはやどこでも泳ぐことができなくなってしまいました。

湖の汚れを総合的に判断する一つの指標として透明度というものが用いられますが、霞ケ浦については六十年も前から木原沖や沖宿地先で測定されています。木原沖の記録を見ると、大正の始めでは年平均一六五米、昭和四十年には一四五米ですから、二〇センチ低くなるのには約五十年以上も経過していますが、最近では二、三年の割で二〇センチの低下がみられます。また、県の公害白書によれば、霞ケ浦の全窒素は昭和四十二年頃から明らかに急激な上昇カーブを示しています。

これらのことからみて、汚濁は四十二年頃から激しくなってきましたが、その前後において霞ケ浦周辺ではどんなことが起きたか、そしてそれが汚染とどのような繋がりを持つようになったかを追ってみることにします。

◇　人口の都市集中化

霞ケ浦流域の人口は約八二万人といわれています。十年前には七九万人ですから三万人の増加ですが、土浦、石岡、鹿島およびその周辺（約四、五万人増）に集中し、その他の地域は過疎化の傾向を示しています。世帯数は都市化、過疎化区域にかかわらず増加し、核家族が多くなりました。私達が家庭生活を営む上で特に問題となる